ヤシロと上代人

——ヤシロの基礎的考察 その2——

正会員 木村 徳 国*

まえがき

小稿は、前報「上代四文献とヤシロ」(日本建築学会論文報告集 No. 322, 昭和57年12月)を受け、そこに提示した資料および序論を踏まえつつ、上代人とヤシロとのかわり方を中心にして述べたものである。筆者の重視した「歴史のうちに於ける建築——ここではヤシロ」の一端となっている。特に「ヤシロの創設」に注目し、文献面よりすれば、ヤシロが、人間の側の主体的参加によって初めて存在し得たものとして記述されていることを明らかにした。また、ヤシロに近き人として、特にハフリの大きさにつき、重くとりあげている。

Ⅲ ヤシロと神と人と

§1 ヤシロと神と

a. ヤシロと神との異同について

前章末に、ヤシロと神とが、上代四文献中、すでに同格に扱われ得るほど、密接したものであることを示す二・三の例文を掲げた。ただし、この事実は、ヤシロと神とが同じものであったことを意味しない。本来からいえば、まったく別ものであった。これをもっとも端的に示すのは、表1・2・3中、次のごとき文形が、多数存在することである。

イ)「神の社」(神名を伴うことあり)。

ロ)「社に坐す神・社の神」(社名・神名を伴うことあり)。

上記の(イ)は、現代語「^{ジンジャ}神社」の祖形と考えられ、書紀中「ヤシロ(神社)」(語番22)に1例をみる。他は、すべて、神名の有無を別にして「カミのヤシロ」である。万葉集歌中には「之・乃」を入れた例もみえる(表—3参照)。そして、神名なき場合は、その省略形か、または一般形と解せられよう。

また(ロ)は、ヤシロと神との関係の一端を、一層あきらかに示す。すなわちヤシロとは「神の坐すところ」¹⁾であった、ということである。

これを裏から明示するのは、神の発語としての次である。

イ)「吾は、高市社に居る、名は事代主神なり。又、身狭社に

居る、名は生霊神なり。」(天武紀元年七月)

ロ)天津子命、詔りたまひしく、「吾が静まり坐さむと志ふ社」^{オモ}と詔りたまひき。(風土記出雲国意宇郡屋代郷)

加えて、同じく神の発語としての「吾がヤシロ」という形が、天武紀元年七月条(村屋神)や風土記肥前国基肄郡姫社郷条(姫社女神)にみえることも忘れ得まい。

以上、目につくいくつかを拾ったに止まるけれども、これらのみによっても、ヤシロと神とは別ものであることは分明であり、ひとまず「ヤシロは神のものであって、神の坐すところ」として把握することができよう。

b. ヤシロに神が「坐す」ということ

「坐す」とは、上引にもみえたように「居る」の尊敬表現であって、人間の場合の「住む」に近い。現に、ワカセリヒメ命の社(「奈具佐社」, 出雲国神門郡)には、所造天下大神がツマドヒに通っていた(風土記同条)。

しかしながら、神がヤシロに「坐す=居る」の内容は、主格が人間ならざる神であることにより、単なる「住む」を越えており、複雑な、かつ漠然とした意味をもつ。たとえば、垂仁紀二年のツヌガアラシト渡来説話にみえる美童女(記では、天之日矛渡来伝説にみえるアカルヒメ神)は、わが国に逃れきて「難波に詣りて、ヒメゴソの社の神となる。且は豊国の国前郡に至りて、復ヒメゴソの社と神の為る」。そして「並びに二処に祭ひまつられたまふといふ」(傍点筆者)。

特に驚かれるのは、風土記出雲国の場合で、その出雲郡を例にとると、「不在神祇官」の64社(底本中、社名61社)のリストでは、名のあげられているもの17社ほどにすぎず、他はすべて「同じきヤシロ(同社)」であることである。

同じ社名をもつヤシロの祭神は、神名の有無を別にしても、同一と考えられることは、上掲ヒメゴソ社を想起しても云えよう。しかも、出雲郡という狭い地域の中に、いかに「不在神祇官」という小社とはいえ、このように「同社」の多数存在することは²⁾、ヤシロ・神それぞれの性格さえ反省させずにはおかぬ。

すなわち、ヤシロを「神の坐すところ」として把握する場合にも、これを、人間の「住む」というごとき長期間性なり一所性なりを一義的に前提してはならぬ、とい

* 明治大学 教授・工博

(昭和57年7月1日原稿受理日, 討論期限昭和58年7月末日)

うことであり、あくまで漠然とアイマイに「います＝居る」と解せざるを得ぬのを知られる。

関連して、なお一事、忘れ去ることのできぬ件がある。それは、「ヤシロは神の坐すところ」ではあっても、「神の坐すところ」が直ちにヤシロであるのではなかった、という事実である。筆者にとり大きな発見であった。で、節を変えてふれたい。

§2 ヤシロの創設

a. ヤシロ創設とその語法

上代四文献中、その起源の語られぬヤシロは多い。また、関連記述の簡単なものも澤山ある。いま風土記各国を例にすれば、「故日高野社」（播磨国語番6）・「郡東国社此号県祇」（常陸国語番5）・「有社」（出雲国語番6・7）・「因号永世社」（肥前国語番3）等のごとくである。で、これらの点だけに目を強く引かれると、ヤシロは、より古き時代から自動的に——ということは、神の側の主体的な意志のみによって——存在してきた、そして、そのようなものとして上代人もヤシロを把えてきた、というごとき形で把握されやすい。

しかしながら、関連記述を仔細に検討してゆくと、ヤシロは、人間の側の積極的・意志的な参加によって、はじめて定め立てられたものとして存し、かつ、上代人もこのようなものとしてヤシロを把握・認識していたことがあきらかとなる。

この場合、神の意志・願望は、一般的に尊重されていた。が、極端な場合には、後に見るように、神の意志をしりぞけ、人間の側の主体性の押し通されたこともあった。そして、以上のことは、ヤシロ創設の語法において、まず明示される。

「定む」について、はじめにいう。古事記中、はじめでヤシロという語のみえるのは、崇神記「神々の祭祀」段中の次である。記中、初出であるだけに目を射る。

又イカガシコヲ命に仰せて、天の八十ヒラカを作り、天神地祇の社を定め奉りたまひき。

この同じ事柄は、紀中⁴⁾、崇神紀七年十一月では、

便ち別に八十萬の群神を祭る。仍りて天社・国社、及び神地・神戸を定む。

として、同じく「定む」を用いている。

この「定む」につき、底本記・紀は特に注されぬが、『古事記伝』⁵⁾（二十三之巻三十六・七葉）は「定奉」と項を立て「奉は祭の意なり、此は本より其社は有ながら、仮そめなる、或は荒れなどせるを、新めて善く修理成し、定めを立て祭り賜ふなるべし、定とは、祭の式のみにも非ず、祭るべき社々をも定め賜へるならむ」（傍点筆者）として、次に上引書紀の文を引く。すなわち、宣長は、この「定む」については、崇神天皇（＝人間の側）が「ヤシロを創立した」と解するのを、むしろ否定する立場に立つ。

しかしながら、上代四文献中、ヤシロ創設に関する「定む」は、他に1例がみえ、神功前紀の次である。これは、出征せんとする皇后に、住吉三神が「我が荒魂をば、穴門の山田邑に祭はしめよ」と教えた件にかかわる。

（皇后）「神の居しまさ欲しくしたまふ地をば、必ず定め奉るべし」とまうす。則ちホムタチ（踐立・人名）を似て、荒魂を祭ひたてまつる神主とす。仍りて祠を穴門の山田邑に立つ。

この記事は、穴門（現・下関市）住吉神社の起源説話である。と同時に、ヤシロを創設するには、はじめに「神の欲する地」を占定・撰定する必要のあったことを示す。（このような例を後にも掲げる。）

ヤシロに直接する「定む」は、上の3例に止まるけれども、これを多少ひろげれば、たとえば垂仁紀二十五年細注のいう、

則ちヌナキワカ姫命、^{ツラ}トに食へり。因りてヌナキワカ姫命に命せて、神地を穴磯邑に定め、大市の長岡岬を祠ひまつる。

も、倭大国魂神にかかわり、その神社⁶⁾の創立説話としてよい。で、現在の私見では、ヤシロに関する「定む」とは、占地と深くかかわりつつ、その創設を示す語法とみたい。加えて、言葉としての「サダむ」は、他動的であり、すでに人間の側の主体性——語を弱めれば、人間の側の参加——をあきらかにうかがい得るのではなからうか。

「立つ」について次にいう、上述をいよいよ補強するものは、語法としての「立つ＝立てる」である。上にも穴門住吉神社の創立に関してみえていた。この形は、古事記・万葉集（歌）には見えず、書紀に3度、風土記に4度ほどみえる。全例を掲げる。

1. 故、（天照）大神の教の隨に、其の祠を伊勢国に立てたまふ。（垂仁紀二十五年三月。紀非対偶語番4。）
2. （神功）皇后の曰はく、「必ず神の心ならむ」とのたまひて、則ち大三輪社を立てて、刀矛を奉りたまふ。軍衆自づからに聚る。（神功前紀。同上語番7。）
3. （前掲、穴門住吉社に関するもの。省略）
4. ここに、衣縫の猪手・漢人の刀良等が祖、此処に居らむとして、社を山本に立てて敬ひ祭りき。（下伊勢の榊神社。風土記播磨国揖保郡伊勢野条。その語番1。）
5. 其の子孫、社を立てて祭を致し、相續ぎて絶えず。（不明社。常陸国那賀郡茨城里条。その語番18。）
6. （カゼコ・人名）即て社を立てて祭りき。（姫社社。肥前国基肄郡姫社郷。その語番7。）
7. 時に（来目）皇子、勅を奉りて、筑紫に到り、乃ち、物部の若宮部をして、社を此の村に立てて、其の神を鎮ひ祭らしめたまひき。（板部物部神社。肥前国三根郡物部郷条。その語番9。）

すなわち、ヤシロは、人間の側の主体的参加によって、はじめて「立てられる」ものであった。このことは、上代語「タツ」の原意が、「雲がタツ・波がタツ・鳥がタツ」のごとくにみられるように、今まで存在せずゆえに見えなかったものが、目にみえるように存在するようになる

こと⁷⁾であり、その他動的用法としての「立つ＝立てる」であることを思うと、一層の有意性を伴って実感されるであろう。

「設く」およびその他につき、おわりにふれる。ヤシロ創設に関し、ただ1例であるが「設く」がみえ、次節に引く風土記常陸国行方郡の「夜刀神社」の起源につき「社を設けて初めて祭りき」とある。

また「マツる」も、「カゼコ（人名）を齎^マぎて、神のヤシロを祭らしめき」（先掲肥前国姫社社）のごとく、特にその神社の初出の場合には、注意すべき語法であろう。

その他、特殊な例として、常陸国香島郡首の

其処に有せる天之大神の社・坂戸の社・沼尾の社、三処を合せて、惣べて香島天之大神と称ふ。

も、底本が頭注されるように、鹿島神宮の創立にかかわるものとみなすことができる。

以上、ヤシロの創設を、特に関連語法においてみたのであるが、その中心となる「定む・立つ」によっても、ヤシロが、あくまで人間の側の主体的参加によって、はじめて存在し得たことを、あきらかになし得たと考える。そして上代人も、これをはっきり認識し、ヤシロをそのようなものとして扱っていたのである。加えて、これに反する記述は、上代四文献中、みいだすことはできぬ。なお、以下にふれてゆく各項においても、以上は一層、補強せられるであろう。

b. ヤシロ創設の理由

それでは、いかなる理由によって、上代人はヤシロを定め立てたのであろうか。人びとが積極的に参加するには、それなりの根拠がなくてはならぬ。

これを、きわめて端的に言えば、神を「キヤビ、イハひ、マツり、シヅめる」⁸⁾ためである。これらは、根本的には、行為的な事柄で、神に対し形としてこれをあらわすことである。それゆえ、多くの記述が示すように、それなりの儀礼的行為として示せば足りるのであって、必ずしもヤシロの創立を必要とはしなかった。けれども、神を、大きくよるこばせ、大きく「イハひ、シヅめる」ためには、神の坐すところとしてのヤシロを「定め、立て、設け、祭る」ことを、我が国の神は要求した（と上代人は想定した）のである。その大きさこそ、ヤシロ創立の根本的理由となる。それは神宮創立の場合にあっても同様であろう。

はじめに、前項にとりあげた「ヤシロの定め立て」られる記・紀の4件の具体的理由を検すると、次のようになる。

イ) 天下に瀾漫した「役の氣」を鎮めるため。

（大三論および諸々の天社・地社。記・紀崇神天皇）

ロ) 父・崇神天皇の遺志をつぐため。

（伊勢。崇神紀・垂仁紀）

ハ) 神威により、新羅征討の軍衆を集めるため。

（筑前大三輪社。神功前紀）

ニ) 新羅征討に関する神託に應えるため。

（穴門住吉神社。神功前紀）

これらは、記・紀という文献の性格によって、流石に国家的であり、比較的にスケールは大きい。あるいは、強い国家観念の多く形成された後の、すなわち、比較的后世的なものであろうことを思わせる（あるいは、中国の思想の多少の程度に反映していないであろうか。）⁹⁾。

しかしながら記・紀においても、しかも天皇にかかわる神社創立説話の中でも、さきに言及した倭大国魂神の場合（垂仁紀二十五年細注）では、この神は、崇神天皇の神々の祭祀の仕方の「微細しくは未だ其の源根を探りたまはずして、粗^{オロソカ}に枝葉^{ノチノヨ}に留まった（非根源的であった）」ので、崇神の「命短」であったという。この神託を受けて、垂仁天皇が、この神の神地を定め祠った。この場合の立社（？）の理由は、いかにも現世利益的であるといえるであろう。

しかして、この「現世利益」的あり方こそ、実は、七、八世紀の全国各地に多数存在していたヤシロ——出雲一国だけでも399社¹⁰⁾——の立社の理由であったようにみえる。先掲記・紀4件の場合のごときは、むしろレアケースと想定し得る。そしてこの内容は、ややもすれば周辺の人間を損い害しがちな神威を「イハひシヅめる」ためと推定してよい。以下、例として、風土記よりヤシロ創設譚の目を射る3者を引こう。

イ. 常陸国行方郡の夜刀神のヤシロのこと。

繼体天皇治世、箭括氏のマタチという者が、郡家より西の谷の葦原を切り払い、新田を開こうとしたところ、頭に角ある蛇の形をした夜刀神が群きて妨害した。マタチは大いに怒り「甲鎧^{ヨロイ}を着被^ツけて、自身仗^{ホコ}を執り、打殺し^{ウチコロ}し驅逐^{オビヤ}」した。ただし、この神は、「見る人あらば、家門^{ホロボ}を破滅し、子孫継^{ツグ}がず」というような害神だった。で、「山口に至り、標^{タビ}の税^ツを堺^{サカイ}の堀^{ウツリ}に置いて、夜刀神に云った。「此より上は神の地と為すことを聴^{ユル}さむ。此より下は人の田^タと作^{ツク}すべし。今より後、吾、神の祝^{イハヒ}と為りて、永代に敬^{イハヒ}ひ祭らむ。冀^{イハヒ}はくは、な崇りそ、な恨みそ」。そして「社を設けて、初めて祭りき」というのである（後日譚省略）。現在も、茨城県玉造町に夜刀神社があるという。低級下位の害神ではあるが、神威を鎮めるためにヤシロが立てられた例である。と同時に、人間の側の主体性が大いに発揮された例ともなっている。

ロ. 常陸国久慈郡賀毗礼高峯の天神のヤシロのこと。

この神は立速男命または速経和氣命といって、天より降った神であったが、「即ち松澤の松の樹の八俣の上に坐」した。この神の祟は「甚だ厳」で、人がそちらを向いて大小便をすると「災を示し、疾苦を致さしめ」た。人々は困苦を朝廷に訴えた。派遣された片岡大連は、祈って

「今、此処に坐せば、百姓近く^{イヘホ}家して、朝夕に^{クガラ}穢臭はし。
理^{コトワリ}、坐すべからず。^{ウベ}宜、避り移りて、高山の淨き境に
鎮りますべし」と。神はこの言を聴いて、「遂に賀毗礼
の峯に登りまし」た。そこをヤシロとしたのである。

これは、論理的説得により害神の居を移さしめたので、
崇神を祀ると同時に、やはり人間の側の主体性が発揮さ
れた例である。

ハ. 肥前国基肄郡姫社郷の姫社のヤシロのこと。

昔、山道川の西に荒ぶる神がいて、路行く人の半数が
殺害された。これを^{ウラナ}卜うと、「筑前国宗像郡の人、^{カゼ}珂是
古^コをして、吾が社を祭らしめよ。若し願に^{カナ}合はば、荒ぶ
る心を起さじ」という。で、彼を探し出して、ヤシロを
祭らしめたのである。

上引3例の主役は、天神・(渡来)神・低位の蛇神と
いうように、ひろがりは広い。が、皆、放置しておく
と厄災を与えた。それでヤシロが立てられたのである。そ
こに共通するのは、神に対する恐れであって「神を尊崇
して」というような、綺麗ごとからのみ発したのではな
かった。つまり「イハヒシヅめる」とは、厄災をなす神
威を「平安にする・鎮静する」という意を重くふくみ、
広義において現世利益とつながる。また、既にヤシロあ
る神に対しても、現世利益を乞うことは多く見え、表一
1の末尾に「祈雨・請雨」が並ぶのは、その例となろう。

c. 場所の撰定

上にもあきらかなように、具体的なヤシロの創設行為
にかかわって、特に重要と考えられるのは、ヤシロの地
の占定・撰定である(占定・撰定する人については、同
様に重要であるが、次節にまわす)。

この場合、ヤシロの立てられる地を、あるひろがりあ
る「境域」という語を用いるべきか、より狭い「地点・
位置」等の語に従うべきか、イメージに関連して問題は
残る。が、ここでは、ヤシロが「トコロ(所・処)」を
以て数えられることに主によりつつ、漠然と「場所」と
呼んでおく。

さて、この占定のされ方をみると、大別して次の2者
がみられる。

- 神意のそのまま尊重される場合。
- 神意より人間の側の主張の優勢な場合。

後者については、武威によった場合(夜刀神社)と、
論理的説得によった場合(賀毗礼高峯社)との2件を上
にみた。が、このような記述の例は多くはなかった。一
般的には、特に高位の神の場合では、神の意志を尊重し
「^{マホ}居しまさ欲しくしたまふ所」(神功紀・住吉三神)が
撰ばれたように読みとれる。

その代表的な例となるのは、垂仁紀二十五年三月条に
みえる天照大神の場合であって、この神を「託け」られ
た倭姫命は「鎮め坐させむ処を求めて」、菟田の篠幡よ
り近江国に還り入り、美濃を廻って、伊勢国に到った。

この遍歴の長さは驚くに足りる。加えて、ここに決定し
たのは、大神が「是の神風の伊勢国は、常世の浪の重浪
の帰する国なり。傍国の^{ウツ}可^{ムス}怜^シし国なり。是の国に居らむ
と欲ふ」と教えたからである。後文に「則ち天照大神の
始めて天より降ります処なり」とあるのは、上引の一種
の合理化に過ぎぬと推せられるが、神意によることの強
調として把握できよう。

上の場合、占地は、神語に随った形となっていたが、
より具体的に、撰地の方法を語る例が、風土記肥前国に
みえる。先掲ヒメコソ社の場合である。

この害神は、厄災を止める条件として、まず、カゼコ
という「祭主」を指定し、彼が「吾が社を祭る」ことを
要求する。(神が祭主その人を指定することは、たとえば、
大三輪神におけるオホタタネコの場合のように、決して
珍らしくはない。倭大国魂神の場合のヌナキイリヒメ、
伊勢斎王など、卜定されるのも、神意を尊重した形であ
る。)ただし、この件について特に注意されるのは、撰ば
れたカゼコ自身、いかなる神が自分を撰んだのか皆目見
当のついておらぬという事実である。で、彼は、幡を捧
げて「誠に吾が祀を欲するならば、此の幡、風の順に
飛び往きて、吾を^ホ願^ホりする神の^ホ辺^ホに墜ちよ」と祈る。す
ると、その幡は「^{モリ}姫社の社」と「^{ホトリ}山道川の辺」の二か
所に落ちた。前者が本処で、後者は、いわば出張地であ
ることを知った。彼は、いかなる神かをいまだ知らぬが、
その欲するヤシロの場所だけは、ここで明らかとなった。
(彼は後に夢に女神であることを覚る。)

記述は「即て社を立てて祭りき」というのみで、その
どちらにヤシロが立てられたかは分明ではない。が、社
名よりして、まず本拠が優先されたのであろう。

以上、ヤシロの創立に関し、語法・理由・撰地の3点
より、文献的に追いうることをみた。繰りかえしを恐れ
ずにいえば、その何れの点よりみても、ヤシロは、神の
意志のみによって存在したのではない。人間の側の参加
をまっしてはじめて存在し得たのであり、上代人もかかる
ものとしてヤシロを把握していたのである。そして立社
の根拠は、主として、このことによって人間の側が神の
威力による厄災からまぬがれ、現世の利益にあずかるた
め、神を、大きくイハヒ・マツリ・シヅめ、大きくよろ
こばせることにほかならぬのであった。以上を考慮する
と、先稿に紹介した古語辞典¹¹⁾の、ヤシロの項のはじめ
にいわれる「神の来臨する所・神の降下する所」とは、
言葉が簡単にすぎて、精確さに不足するといえよう。

なお、ヤシロを上のように把握するとき、その歴史性
にかかわり、ヤシロの起源や、ヤシロ以前を、はじめて
正式に考えることが可能となる。

また、ヤシロを考えようとする時に、常につきまとう
困難さから、ひとまず解放されることになる。

その困難さとは、ヤシロにはなほだ近きものとして存

在していたことを知っている「聖地・聖所・聖物・聖建造物」等と、ヤシロとの異同の関係の不分明さそのものであって、いまやわれわれは——少なくとも筆者は——次のように理解してよかろうことの端緒を得たのである。すなわち、一言でいえば、それらの神聖なものうち、上代人がヤシロとして定立したものがヤシロであって、以外は、あくまでヤシロ以前の神聖地・神聖建造物等として止まったであろう、そして、やがてその神聖性を薄めていったであろう、ということである。

なお、この件は、後に続く別稿で、あらためて考えたい。

§3 ヤシロに近き人

上にふれたヤシロの創設、特にその撰地等にかかわって、重要にはたらいたのは、上例にみたカゼコ（姫社社）のごとき、これを「執行する人」であった。この場合、人名がわかっても役名にふれられぬこともあって、先に一般詞として「祭主」と呼んだ。が、穴門住吉社（神功前紀）ではホムタチは「カムヌシ（神主）」とされ、常陸国夜刀神社では、マタチはみづから「吾、神のハフリ（祝）と為りて」と述べていた。

これら、神主・祝等は、後に神職・神官として、神社と深い密接なかわりを持つようになる。そのかわり方は、たとえば僧坊が付属すれば寺院のイメージの大きく変化するように、ヤシロのイメージと無関係ではあり得ぬ。本節では、後に神職・神官としてヤシロと大きくかわった人びとが、上代四文献中、いかなる姿をみせているかにつき、ヤシロの創設とのかかわりにも目を配りつつ、概略にふれておこうとする。

a. カムヌシ

上代四文献中、カムヌシは「神主」と表記されることが多いが、神事にかかわって「主」一字でカムヌシと訓まれる場合が、崇神紀・神功紀等にみえる。また後者には「祭神主」で「イハヒのカムヌシ」と訓まれるごとき例がみえる。

これらの場合の「主」とは、国を譲った大己貴神に対するタカミムスビの神語中「又汝が祭祀を^{マツリ}主^{ツカサド}らむは、天穂日命、是なり」(神代紀第九段一書第二)にみえる「主」と同じく、「(比較的上位の)¹²⁾ 神のマツリをツカサドる人」の意である。すなわち、カムヌシとは、本来、主役として神をマツる人一般を指し、決して、後世の、「ヤシロに奉仕する者の上座たる職能者」を意味してはいなかった。たとえば、神功前紀に、次のごとき記述がある。

(仲哀九年三月一日) 皇后、吉日を選びて、斎宮に入りて、親ら神主と為りたまふ。則ち武内宿禰に命じて琴撫かしむ。中臣鳥賊津使主を喚して審神者にす。(仲哀に祟った神を知る為にマツる。)

すなわち、女性ですらある皇后みづから、臨時的に、カムヌシとなったのである。このように臨時的であることは、神功紀のみをとっても、同年九月「因りて依網吾

彦男垂見を以て^{イハヒ}祭の神主とす」についても同じく、同年十二月の「踐立の神主」の件についても同様である(共に住吉三神をマツる)。

このような神事の際に、神がその人を撰び指定することもあった。記・紀崇神「神々の祭祀」における、大物主神のオホタタネコの指定、倭大国魂神の市磯長尾市の指定(同紀七年)、や、ヒメコソ神のカゼコ指定等が目につく諸例となっていた。

すると、カムヌシとは、あくまで「神をマツる際の主人役」なのであって、本来、臨時的なもの、または一般詞、なのである。それが、上代四文献における、ヤシロとカムヌシとのかかわりの稀薄さの、真の根拠だったのである。というより、ホムタチがヤシロとかかわってカムヌシとしてみえたのは、先にもふれたように、ヤシロの創設も実は神をマツることのうちにふくまれ、そのもっとも重要な形式であった、と考えなくてはならぬのである。

ただし、神主となるには、接神能力に長ずることを、おそらく必要とした。また、その縁により、次第に職能化し、あるいは世襲化してゆく。で、ヤシロとの関係を密にしてゆく。継体紀元年三月詔に、

^{アマツヤシロクニツヤシロキミ}
神祇には主^{ツカサド}乏^{モト}しかるべからず。

というのは、この間の事情を語るのであろう。また、世襲化してゆくありさまの一端は、宮廷の祭事を負うた中臣氏の祖にかけて、

^{マタ}且、天兄屋根命は、神事を^{ツカサド}主^{モト}る宗源者なり。故、^{フトマニ}太占^{ウラ}の卜事^{フツ}を以て、仕へ奉らしむ。(神代紀九段一書第二)¹³⁾

が、表明していよう。

以上のように、上代四文献中のカムヌシの位置は、後世の「神官の上座」に転化しきってはいないとしてよい。(このことは、令制においても同じく、『職員令』・「神祇官」の令文そのものには、「神主」は出ていない。)

ただし、天武紀六年五月の勅に、

天社地社の神税は、三つに分ちて、一つをば、神に^{ツカヘマツ}擬供^{ツカフ}るが為にし、二分をば神主に分ち給へ。

という目を射る記述がある。現在の私案では、この神主の中には、おそらく次にふれる「ハフリ(祝)」をも含まれるものとみたい。その根拠は上に述べてきたことによるのであるが、加えて、万葉集歌中(十三-3229)に「神主部」という表記があり、底本では「カムヌシ」、日本古典文学全集本では「ハフリへ」と訓まれており、一定せぬことも、一つの参考となろう。と同時に、上引勅文は、カムヌシが(上位)神職として確立されてゆく遷移の過程を示すものとして把握し得るように思われる。

(なお、後世、神職として「神主」に次ぐのは「祢宜」である。これは、続日本紀中、天平二年(729)七月の「大神宮祢宜」を初出とし、続紀中十数件みえる¹⁴⁾。特に、天平勝宝元年(749)十二月二十七日条には、

八幡大神祢宜尼大神朝臣杜女[其興紫色。一同乗輿。]拜東大寺。

(傍点筆者)

のごとき注目すべき記述がある。が、ネギは上代四文献には一切みえぬので、省略にしたがう。)

b. ハフリ・カムナキ

ハフリかハブリか、近時濁音に移行しつつあるようにもみえるが¹⁵⁾、ここでは清音で統一する。また、その用字は、上代四文献を通じて「祝」がもっとも多いが、他に「祝者」(欽明紀十六年三月)、「祝人」(同紀二十三年六月)等がある。もっとも後者は、文脈から「ハフリへ(祝部)」と訓まれている。しかしながら、紀中、「祝部」と用字されながら「ハフリ」と訓まれる例もみえる(神代紀・持統紀)。「祝部」という用字は、基本的にはハフリの集団なり複数を前提する表記法と推せられる。なお、「祝部等」と表記して「ハフリラ」と訓まれる例が、書紀・万葉集歌(2309)・祈年祭祝詞などにみえた。「祝部」の実体を明らかにせぬので、論は慎むけれど¹⁶⁾、『岩波古語辞典』で「同じ」とされているのに従って進む。

令制では、「祝部」は「神祇伯」の所掌(職員令・神祇官)となっており、そのつとめについて、『令義解』はその条に、次のごとき注記をほどこす。(便宜上、段落を加えた。)

謂。(a) 為祭主賛辞者也。(b) 其祝者、国司於神戸中簡定、即申太政官。(c) 若死戸人者、通取庶人也。

(a) について、『令集解』中「釈記」は『説文』からの利用とするのであるが、祭主、すなわちカムヌシとなって祝詞を申すことをいう。神職の階級が固まって後、神主・祢宜より下級に位置づけられるハフリではあるが、古くは特定の神祭においてはカムヌシとなり得たのである。

(b) は、ハフリが「神戸」より撰ばれたことを云う。官に登録されたとはいへ、すでに庶人的であったことを示す。(c) はそれをいよいよ強調して、神戸なき場合は、一般庶人からでもよい、とする。ハフリの民衆的性格は、きわめてあきらかとしてよからう¹⁷⁾。なお、以上の中b・cとほぼ同文が、『令集解』中、天平十年前後に成立した「古記」の説として紹介されている。これは「大宝令」(701 撰)の注釈であるから、七・八世紀の交におけるハフリの実体とみてよい。しかも、上に述べたところは、上代四文献にみえるあり方とまったく軌を一にしている。

それを整理すれば、ハフリの性格は、次のようにまとめ得よう。

イ. カムヌシの臨時的であるに比し、ハフリはより特定のヤシロ(又は神)に直接し、密着している。

ロ. ゆえに、後の神主の比較的に中央的・高位的性格に比し、より地方的・在地的性格を示す。

ハ. それは民衆性とも固く結びつく。

ニ. と同時に、接神能力に長じ、その内的資質を自ら

物語る。

ホ. 後に、神主より下位に位置づけられるのは、上項中、ロ・ハ(・ニ)が大きく働いたゆえであろう。

ヘ. 以上を通じて、きわめて古代的性格を担っている。およそ以上のごとくであるが、上を証する記述の目を射る諸例を、以下に掲げよう。

ハフリが、特定のヤシロ・神と直接していたことを示す記述は、きわめて多い。たとえば、古事記中、開化天皇の妃を、

近淡海の御上の祝が以ちイツク天之御影神の女。

といい、垂仁記では、ホムチワケ王説話に、

若し出雲の石碯の曾宮に坐す葦原色許男大神を以ちイツク祝の大廷か。

がみえ、書紀では、神代紀第八段一書第二に、草薙剣を注して次のようにいう。

此は今、尾張国の吾湯市の村に在す。即ち熱田の祝部の掌りまつる神是なり。

また、神功紀元年には「アヅナヒの罪」の説話がある。これは「(小竹・天野)二つの社の祝者を、共に合せ葬」めた結果、「昼の暗きこと夜のごとくして、已に多くの日を経」たのであった。生前両人は仲がよかった。にもかかわらず、両者を合葬したことにより罪を生じた。その理由は、それぞれの奉仕するヤシロの神の相違していることに原因があり、合葬は、両神それぞれに対する不敬となったものと推定される。ハフリの、特定神奉仕という性格を明示する件例である。万葉集歌中にも、「三輪の祝」(四-712)・「住吉に斎く祝」(十九-4243)がみえた。

かくのごとく、特定神奉仕という性格の強さは、全国各地に無数の神・ヤシロの存在していたことと重ね合わせて考量すると、ハフリの全国各地での存在、つまり、ハフリの在地性・民衆性を、一層あきらかなものとする。と同時に、神々なりヤシロなりの国家神道的統合以前よりという古代性を、明示するものといえよう。

これを証するとき二・三を引く。

その一は、たとえば、神武紀や景行紀の語る各地の服属説話には、在地祭祀権の服属、と推定せられる件が多くみえる¹⁸⁾。これは、在地の神——実是在地の司祭者——が降伏し服属したのである。しかもそのうちには、現にハフリとされるものがある。神武前紀己未年二月に征服される「三処の土蜘蛛」のうちには、新城戸畔と共に「巨勢祝・猪祝」がいた。底本が頭注される「祝とあるのは小部族の祭祀権を持つ酋長であろう」に従いたい。そして、征服された後は、その神の低位化と共に、司祭者の位置も下降せざるを得なかったことを、容易に想像できるであろう。

その二としてあげたいのは、上にふれた在地祭祀権とからんで、きわめて古代的な神判者としてハフリが存在

したと推定される事実である。この神判のうち、もっとも名高いのは、允恭紀四年の「区訶陀智（盟神探湯）」である。その神とかかわったことは「盟神」の用字にも、「勅して、神祇に請して探湯せしむ」（応神紀九年四月）や、垂仁紀二十五年細注中「中臣連の祖」を「探湯主」とすることなどで明らかである。しかも、このクカタチは、継体紀二十四年では「築みて誓湯置く」ことが、すでに批難の対象となっているので、古代性は一層あきらかである。

さて、ハフリが、かかる神判の執行者であったことを語るのは、欽明紀二十三年六月の次の件である。無実の罪で刑死した馬飼首歌依の子供達（守石と名瀬氷）を、重ねて、^{ヒトヤツカサ}廷尉が死罪にしようとして、火の中に投げ入れようとする。その時に、

呪りて曰はく、「吾が手もて投るるに非ず。祝の手を以て投るるなり」といふ。呪り訖りて火に投れむとす。

とある。これは、廷尉が、自分の行為の正当化（ないし責任転嫁）をはかり、神判に擬して云ったのである。とすれば、わが国古代の宗教的裁判において、ハフリは、死罪のごときを執行したかというきわめて重大な推定をすら生じさせることになる。筆者は、古代在地支配権とむすびついた司祭者の、刑執行者としての位置の投影されたものとして、この記事を抱えたい。

（なお、この子供達は、母の祈りにより、「祝人に付けて、神奴とな」る形で、刑死を免れた。われわれはここに、ハフリへの下に、「神奴」の存在を知り得ることになる。）

ハフリは、このように神に近かったので、しばしば神が着いた。たとえば、イザナギ神が「託」った場合を履中紀五年九月はいい、村屋神が「着」った場合を、天武前紀七月はいう。

また、このような異能を持ったことは、天変地異などに際し、神意を称して、かならずしも官の希求せぬような行動に、民衆を走らせもした。皇極紀元年七月に、これは干魃に際してであったが、

村々の祝部の所教の随に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を禱る。既に所効無し。

とみえ、官は対応に困しんでいる。

また、同紀三年七月には、大生部の多の「常世の神」として「虫祭ること」の勧めに従って、「^{カムナキヲ}巫覡等」が、先立って流言を広めるようなことをした。

是に由りて、^{マスマスス}加勸めて、民の家の財宝を捨てしめ、酒を陳ね、菜・六畜を路の側に陳ねて、呼はしめて曰はく、「新しき富入来れり」といふ。

この件は、多が誅せられて止むのであるが、この時の彼等の姿を推定すると、髪を長く垂れ「枝葉を折り取りて、木綿を懸掛けて」民衆を扇動・先導したのである。

上の「垂髪」は、天武紀十三年閏四月の勅文¹⁹⁾にみえる。また「枝葉・木綿」の件は、上の勅文中「巫祝之類」と併称されている「カムナキ（巫覡）」に関連する記述（皇極紀二年二月・同三年六月）によっている。

ここに、ハフリとカムナキとを括ったのは、上にふれた勅文によるばかりではなく、和名抄²⁰⁾十卷本・二十卷本ともに「巫覡」の項を立て、次のようにいうことによる。ここでは、二十卷本から引く。

説文云巫/無反/和名加牟奈岐/祝女也

文字集略云覡/乎乃古加牟奈岐/男祝也

すなわち、カムナキ・ハフリの同一性が語られているとしてよい。

この場合、注目せられるのは、和名抄中の位置である。承平年中成立とされること多い十卷本では、卷一の中、「人倫部男女類」——ただし、その配置は「工匠・鍛冶・陶者」に次ぎ、「獵師・漁子・漁父」が続く——に位置するが、遅くとも平安末期までに成立したとされる二十卷本では、卷二の中、実に「乞盜類第二十三」のはじめに置かれ、次は「游女——ウカレメ・アソビ」が続いていることである。その位置の著く下降したことが知られる。

これは、先にみたハフリの在地的・被征服者的な歴史性、また、接神性という異能から発し、特に下級ハフリの、一般良民社会からドロップアウトした特殊なあり方の記述への反映とみてよかろう。すでに、天武紀の「巫祝之類」という語法にも、これは反映していないであろうか。

しかしながら、万葉集歌中に、ハフリは数度²¹⁾みえるのであるが、そのうちでは（おそらく当時の大きな）神社に奉仕する清らかな姿がうかがわれる。そのような一首をここに引いておく（十三-3229）。

斎串立て/^{イサナ}神酒坐^{カミナリ}奉^{ホウ}ハフリへ（神主部）が/うずの玉陰/見れば羨しも²²⁾

（なお、ハフリにきわめて近きかと思われるものに、令中「祝部」と併称される「卜部」がある。これは、たとえば、常陸国香島郡に「（香島）神の社の周匝は、^{ウラベ}卜氏の居む所なり」のごとくみえるのであるが、上代四文献中、記事が少ないので、ここでは省略にしたがうこととする。）

c. 斎王・斎宮

ここに「斎王」とは、皇統の未婚の女性が、神に撰ばれ（た形をとり）、「御杖」として、神に仕えることを役目とした人をいう。

後世、ほとんど伊勢に限られ「イツキノミヤ（斎宮）」と呼ばれるのであるけれど、古くは伊勢に限定はされなかった。たとえば、病の為に実現はしなかったが、崇神皇女ヌナキノイリ（ワカ）ヒメ命につき、倭大国魂神を「託けて祭らしめ」んとしたことが、崇神紀・垂仁紀にみえ

る。

ただし、記・紀中例でも、伊勢神宮関係が圧倒的に多く、書紀を中心にみれば、次のようである（*印は、古事記もこのことを記すもの）。

イ. *豊鍬入姫命	崇神紀六年
ロ. *倭姫	垂仁紀二十五年
ハ. 五百野皇女	景行紀二十年
ニ. 稚足姫	雄略紀元年
ホ. *荳角皇女	継体紀元年
ヘ. 磐隈皇女	欽明紀二年
ト. 菟道皇女	敏達紀七年
チ. 酢香手姫	用明紀元年
リ. 大来皇女	天武紀二年

以上のほか『斎宮記』によると、(ハ)と(ニ)の間に、伊和志真(仲哀)皇女が位置しており、また、紀中に名のみえる託其(天武)皇女・泉(天智)皇女・田形(天武)皇女が、奈良時代に伊勢斎王となっていた²³⁾。

皇女という身分の高さが、まず目を射る。が、祭と政との深くかかわりあった古代性を担うものとしてよい。また、「未婚の」といったのは、特に(ヘ)・(ト)の両者にかかわる事件によって象徴される²⁴⁾。

彼女達の任務については、「伊勢大神の祠に侍り。(ニ)・(ホ)」のごとく、一般に記述が簡単で、内容は必ずしも明らかではない。が、イ・ロについては「天照大神を託け」とあり、また倭姫(ロ)については、垂仁紀に「以て御杖として、天照大神に貢奉りたまふ」とある。後世「御杖代」とされる起源である。しかも、倭姫は、伊勢という神宮の地を決定したのであったが、先にみたカムヌシの役を負うたのであり、加えて、一般にそれが臨時的ではなく長期間にわたっていた——スカテ姫は37年間奉仕したという(用明前紀)——のであるから、むしろハフリに近い。最高位の巫女と考えてよいであろう。後世「イツキノミヤ(斎宮)」と呼ばれる根拠である。ただし、記紀段階では、「斎王」という語も「斎宮」も、彼女達に対して、未だ用いられてはいなかった。

しかしながら、「斎宮」は、7語4件ほどみえる。それは伊勢関係には限られず、かつ、「イハヒノミヤ・イツキノミヤ」として、宗教的建築(物・施設)を指していわれていた。人の問題からはずれるけれど、神社と密接する建築のことであるから、ここに一瞥を加えておく。

1. 磯宮(伊勢)。垂仁紀二十五年細注。

(倭姫命)故、大神の教の随に、其の祠^{ヤシロ}を伊勢国に立てたまふ。因りて斎宮^{イハヒノミヤ}を五十鈴の川上に興^{ウツ}つ。是を磯宮と謂ふ。

2. 小山田邑斎宮。神功前紀(仲哀九年二月・三月)。

(神功皇后)祟る所の神を知りて、財宝の国を求めむと欲す。是を以て、群臣及び百寮に命^{イハヒノミヤ}せて、罪を解へ過を改めて、更に斎宮^{イハヒノミヤ}を小山田邑に造らしむ。

(三月一日)皇后、吉日を選びて、斎宮に入りて、親ら神主と為りたまふ。則ち武内宿禰に命して琴撫かしむ。中臣鳥賊津使主を喚して、審神者にす。

3. 泊瀬斎宮。天武紀二年四月・三年十月。

(四月一日)大来皇女を天照大神宮に遣侍さむとして、泊瀬^{イツキノミヤ}斎宮に居らしむ。是は先づ身を潔めて、稍に神に近づく所なり。

(三年十月九日)大来皇女、泊瀬の斎宮より、伊勢神宮に向^{マツ}でたまふ。

4. 倉梯河上斎宮。天武紀七年正月・四月。

(天皇)是の春に、天神地祇を祠らむとして、天下悉に祓^{イハヒノミヤ}禊す。斎宮を倉梯の河上(位置未詳)に堅^ツつ。

(四月一日、天皇)斎宮に幸さむとして下^{ウラ}ふ。(七日)トに食へり。(但し、十市皇女の突然の薨で中止)

以上4件(全件)を通じて、伊勢関係は1・3であり、しかも、3は伊勢から遠く離れていたことが注意される。また、斎宮の機能は、一般に「身を潔めて稍に神に近づく所(3)」と推定されるが、(2)によれば、斎宮そのものにおいて神をマツることがあったと考えられる。そのありさまの詳しくは、上引に引続く文を参照されたい。

以上、「斎宮」において多少のより道をなしたが、古代における「ヤシロに近しき人」の大概を通観した。この場合、七・八世紀の交(およびより古く)において、特に注目されるのは、ハフリである。ハフリこそ、もっとも民衆的・庶民的であり、同時に古代性を担ったと推定される。そして、全国にきわめて多数分布していたヤシロの祭神主として位置していた。彼等は、時々のヤシロのマツリをつかさどり、ヤシロの清掃その他の管理²⁵⁾をもおこなったであろう。特に小社の場合では、庶人が臨時的にハフリとなって奉仕したことが考えられる。すなわち、僧尼という特殊な身分として固定された人びとが、常住することを前提とした古代寺院²⁶⁾に比し、ヤシロの性格の大きな相違である。このことは、その空間構成的イメージともかかわってくる。特殊な名神大社を除けば、神職の常住する建造物は、ほとんど無視し得られるであろう。

§4 ヤシロと民衆

本章のおわりに、一般民衆と、当時既存のヤシロとのかかわりにつき、一瞥を加えておきたい。もっとも、上代四文献では、ヤシロに直接する関連記事は多くはない。風土記と万葉集歌が主たる資料となる。そして、民衆を主体としてあえて類別すれば、「崇敬」と「おそれ、ないし迷惑」と「親しみ」の三者として把握できよう。

「崇敬」を第一に掲げた。が、記事としてこれがみえることの少ないのは、一驚に値する。むしろ拾うのに苦しむのであって、一般民衆が、当時ヤシロを「崇敬」していたかにつき、疑問さえ抱かれるほどである。

尤なる一例をあげれば、風土記常陸国信太郡乘浜里浮島村条は、次のように語る。この島は長さ二千歩(約3.5 km)、巾四百歩(約0.7 km)ほどで、15戸の人びとが7・8町の田を作り、塩を焼いて生活していた。しかも、この島には「九社」があつて、人びとは「言も行

も謹諱めり」という。この文言には中国的思想の反映していないかが気にかかるけれど、ほとんど唯一の目を射る件であった。

また、同じく信太郡榎浦条に、これは香島大神に対する官使の場合であったが、「伝駛使等、初めて国に臨らむには、先づ口と手とを洗ひ、東に面きて香島大神を拝みて、然して後に入ることを得るなり」と述べていた。当時の香島神の勢威と、儀礼の一端とをのぞかせる記事としてよい。

次に、「おそれ、ないし迷惑」とは、ヤシロに坐す神の威力による。その威力は、常には「人びとの幸福を助ける」というようなものではなく、むしろ「厄災を下してマヒ（幣）を要求する」という形であらわれる。このような例は、神の場合なら記・紀から多数の例をあげ得られるが、ここでは、ヤシロに直接する二、三の例を、風土記から引いておこう。

出雲国嶋根郡加賀神埼条によると、その窟の中に、キサカヒメ命のヤシロがあった。「今の人、是の窟の辺に行く時は、必ず声トドロカして行く。若し、密に行かば、神現れて、飄風起り、行く船は必ず覆へる」のであった。

また、常陸国久慈郡賀毗礼高峯には、天神・立速男命のヤシロがあったが、「凡て、諸の鳥の経過ぐるものは、盡に急飛避りて、峯の上に当ることなく、古より然為して、今も同じ」であった。人びとも恐れて近づかなかったのである。

同じく常陸国行方郡には、幾度かふれた蛇神夜刀神のヤシロが、継体朝に設けられていたが、孝徳天皇の時代にも、ふたたびヤシロから多く集り出て、民衆を威圧し、その作業を妨害した。かかるヤシロの存在は、民衆にとって恐ろしく、迷惑なもの以外ではなかった。

しかしながら、厄災を下し得る神は威力ある神である。ゆえに、効験もまた、はじめて期待し得る。そこに人びとにとってのヤシロの存在理由も存したであろう。

その効験を祈るためにヤシロに詣でる。そして、これが重なれば、ある「親しみ」もまた生じたのである。

万葉集歌中、ヤシロを持つ歌の全11首ほどのすべては、ヤシロの近しさ、ヤシロに対する「親しみ」を物語る例となる（表—3参照）。しかも、そのうちの8首ほどは「恋」にかかわっている。たとえば、

吾妹子に またも逢はむと ちはやぶる
神の社を 祈まぬ日は無し（十一—2662）

と、比較的真面目にヤシロをいうものもあれば、

ちはやぶる 神の社し 無かりせば
春日の野辺に 粟蒔かましを（三—404）

のごとく、ヤシロを正妻にたとえた戯歌もみえる。これらでは、ヤシロは尊崇の対象としてより、より身近な親しきものに転化しているとしてよからう。また、その

ようなヤシロに対する近しさを生みだした別側面からの1例を、常陸国行方郡から引く。

郡の東に国社あり、此を県の祇と号く。社の中に寒泉あり。大井と謂ふ。郡に縁れる男女、会集ひて汲み飲めり。

ここでは、ヤシロの中の大井が、コミュニティの—中心として、民衆の集ひ語り合う場となっていたことを知られる。その他、筑波の東の峯の歌垣の件のごときも、神にかかわる地の、コミュニティ生活にとって欠かせぬ件例となろうけれど、以下省略にしたがうことにする。

（第Ⅲ章終り）

注

- 1) 前報にふれたように、ヤシロは「所・処」で数えられる。
- 2) 同一神を戴く人々の、地域的发展によるものであろうか。時代はおくれて推古朝のことであるが、風土記肥前国三根郡に、新羅征討に関連して、物部若宮部がこの地に来て「〔物部〕社」をイハハミツったとみえる。
- 3) 「県祇」は底本中「アガタのカミ」と訓まれている。すると、これも、神とヤシロとの同格性の例となる。
- 4) 書紀では初出ではない。表1および4を参照されたい。
- 5) 底本、筑摩書房刊『本居宣長全集』本。
- 6) 底本書紀頭注は、延喜神名式の大和国「穴師坐兵主神社」とされる。ただし、郡は、式中「城上郡」。
- 7) 『岩波古語辞典』参照。
- 8) 「キヤビ」は「敬び」。なお、筆者は「」内をほとんど一つのものとして扱っている。それぞれに多少の差は存するけれど、根を一つにする側面の大きさを考えるからである。
- 9) 関連して想起されるのは、これは「神宮」に関するものであるが、欽明紀十六年二月条にみえる百濟王子恵に対する蘇我卿の教訓である。漢文による記述によるが、中国的思想が強く響くように思われる。
- 10) 「不在神祇官社」をふくむ。「在神祇官社」のみでは184所。なお、延喜神名式は後者のみを記して、「187座、大2座、小185座」とする。計数の基準が異なるけれども、大差なきことは注目に値する。また式によれば、全国で「2861社」の在神祇官社が存した。
- 11) 『時代別国語大辞典・上代編』・『岩波古語辞典』。
- 12) 後世、神主が神職の首座であることは、今日にも引き続いている。なお、神主の語は用いられていないが、「神祇令」第17条に、臨時祭に当って、官より諸社に差遣され「幣帛供すべくは、皆五位以上のトに食へらむ者を取り充てよ」とみえる（訓は、日本思想大系本『律令』による）。
- 13) 底本は、このところ「神事の宗源を主る者なり」とも訓めることを頭注される。
- 14) 『続日本紀索引・六国史索引二』による。
- 15) 底本上代四文献および祝詞、『時代別国語大辞典上代編』・日本思想大系本『律令』等では、清音。『岩波古語辞典』・同上『律令』補注2-1-b等では濁音で訓まれていて一定しない。ここに「移行」というのは刊行年よりいう。なお『岩波古語辞典』は「ハブリ（放）と同根。罪・けがれを放る人の意」とされる。
- 16) 「職員令」中「神祇官」の末に「神部三十人。ト部二十人。使部三十人。直丁二人」とみえる。その「神部・ト部」を底本書紀補注1-99は「祝部にあたる下級神宮」（採意）とされる（『集解』「神祇官」に引かれる物記による）。ま

- た日本思想大系本『律令』の補注 2-1-f は「祢宜・祝にあたる下級神官」とされる。
- 17) 仲哀紀八年正月、天皇の船が神意により動かなくなった時、「天皇、則ち禱祈たまひて、挾抄者倭国の菟田の人伊賀彦を以て祝として祭らしめたまふ」とみえる。船頭という庶人を臨時的にハフリとした 1 例である。
- 18) 景行紀より 1 例を引けば、十二年九月、周防国のサバに神夏磯媛という在地の司祭者が「則ち磯津山の賢木を^{コジト}拔りて、上枝には八握剣を掛け、中枝には八咫鏡を掛け、下枝には八尺瓊を掛け、亦素幡を船の舳に樹てて」天皇に服属していた。
- 19) 勅のおわりに「別に巫祝の類は、髪結く^タ例^{カギリ}に在らず」とある。
- 20) 底本、十卷本『狩谷掖斎・箋注倭名類聚抄』古典索引叢書本。二十卷本、正宗敦夫校『倭名類聚抄』。
- 21) 712, 1403, (1517), 2309, 2981, (3229), 4243。() は底本では別語・別訓。
- 22) ここでは日本古典文学全集本『万葉集』の訓みに従う。
- 23) 『斎宮記』の件は、底本雄略紀元年三月条の頭注による。また他 3 件は、『統紀』にみえる。
- 24) 磐隈皇女は、伊勢に侍へたが、「後に皇子茨城に^カ姁されたるにより解けぬ」(欽明紀二年三月条)。同じく菟道皇女は「即ち池辺皇子に^カ姁されぬ。事蹟れて解けぬ」(敏達紀七年三月条)。
- 25) 万葉集七-1403 によると、この場合、大社・小社の判別はつかぬけれど、神の「杉原」をハフリは守っており、勝手に薪を取りに入った者の手斧を取り上げてしまうようなことのあったことを知られる。
- 26) 地方小寺の場合、僧尼が存しなかったこともみえる。たとえば、風土記出雲国意宇郡のある「新造院」では、「^カ厳堂」はありながら「僧無し」という。ただし稀な場合であろう。

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 726.139

“YASHIRO” AND ANCIENT PEOPLE

by Dr. NORIKUNI KIMURA, Professor of Meiji University, Member of A. I. J.

This paper is the second part (the third chapter) of the thesis “A Fundamental study on Yashiro in Ancient Japan”, and consists of the following four sections.

- § 1. Yashiro and god.
- § 2. Founding of Yashiro.
- § 3. Priesthood.
- § 4. Yashiro and folks.

The author will present the synopsis of the whole thesis in the last part of this series of study to be concluded.